

第4回 公文書センター直江津図書館出前展示会 (2月16日から 3月13日まで)

「上越市立水族博物館の生い立ち」

日本における水族館のはじまり

欧米では、19世紀の中頃から主要な都市で次々に水族館がつくられていきました。博覧会の集客施設として建設されたり、純粋な教育・研究目的で建設されたりするなど、水族館がつくられた経緯には様々な理由があったようです。

日本では、明治15年(1882)3月20日に、農商務省所管の博物館附属施設として上野動物園が開園しました。この時、観魚室も開設されています。また、明治30年9月1日から同年11月30日まで、第二回水産博覧会が兵庫県神戸市で開催され、附属施設として遊園地「和楽園」が建設されました。同園内には水族館が設けられましたが、ろ過装置の設置も「水族館」という言葉の使用も我が国初めてのことでした。

日本海側でいち早く開館したのは、富山県の魚津水族館です。同館は、北陸本線の全線開通を記念して富山県が主催した「一府八県連合共進会」の第二会場として建設され、大正2年(1913)9月1日に開館しました。経営主体の交代や戦中・戦後の中断期間もありましたが、現在まで続く水族館では、日本で一番歴史の長い水族館だと認知されています。

昭和8年の新潟県内の水族館開設状況

昭和8年(1933)7月11日発行の高田新聞は、県内の水族館の開設状況を次のように伝えています。

『直江津町の旅客誘致策の一つとして海岸に水族館を設くべしとの説は既に数年前から唱へられてきたが、古き魚津を始めとし寺泊、能生、柏崎(正しくは鯨波村)等大小水族館が続々出来るのに刺激され又直江津町『海の会』が設立されたので一層此声が高まりつつあるが場所は荒川河口西突堤付近が最も好適とされ同時に突堤を利用して種々の設備を施し遊覧客を集めようと云ふ案が現はれてゐる。【後略】』 (1)

水族博物館に関わる略年表

年 (西暦)	月日	出 来 事
大正 2年 (1913)	9月 1日	日本海側初の水族館であり、最も歴史の長い魚津水族館開館 <small>【魚津水族館HP】</small>
昭和 6年 (1931)	6月 1日	鯨波村浪花屋旅館の弁天岩水族館開館 <small>【『柏崎市史』】</small>
"	8月 1日	寺泊実業協会が上越線全通記念博覧会の第二会場として寺泊水族館を開館 <small>【長岡開府 400 年『ROOTS 400 越後長岡』Vol.2】</small>
昭和 8年 (1933)	7月	直江津町『海の会』が荒川河口西突堤に水族館設置を計画するも実現せず <small>【高田新聞】</small>
"	7月 23日	能生町多喜屋旅館経営の瀧榮六郎が能生町御山に能生水族館を開館 <small>【高田新聞】</small>
昭和 9年 (1934)	***	冬期間(2~3月頃か)に波浪で能生水族館が破壊される <small>【高田新聞】</small>
"	7月 21日	瀧榮六郎が直江津町八坂神社境内(西本町4)に直江津水族館を開館 <上越市域第1代目施設> <small>【高田新聞】</small>
昭和 10年 (1935)	10月 30日	2年目の営業を終え、直江津水族館閉館 <small>【高田新聞】</small>
昭和 11年 (1936)	5月 6日	瀧が春日村の国分寺裏門国道 11 号(現県道大湯・上越線)付近に五智水族館を開館 <上越市域第2代目施設> <small>【高田新聞】</small>
昭和 18年 (1943)	***	五智水族館閉館 <small>【『上越市立水族博物館館報』1985~1990 開館 10 周年記念】</small>
昭和 24年 (1949)	3月	直江津町の中田松三が直江津町大字直江津 1,202 番地(中央4)に私設の直江津水族館を開館 <上越市域第3代目施設> <small>【『昭和 26 年版直江津町勢要覧』】</small>
"	10月 20日	糸魚川商工会議所が建設した糸魚川水族館が落成(昭和 29 年頃開館) <small>【『糸魚川市史』】</small>
昭和 26年 (1951)	3月 1日	直江津町の有志 20 余名が直江津水族館を買収し、県の認可を得て財団法人直江津水族館に改称 <small>【『直江津町歴史公文書』】</small>
昭和 28年 (1953)	6月 10日	県教育委員会から登録博物館の認可が下り、財団法人直江津水族博物館に改称 <small>【『直江津町歴史公文書』】</small>
昭和 29年 (1954)	6月 10日	4月1日に直江津町に移管された後、市制施行により直江津市立水族博物館に改称 <small>【広報なおえつ】</small>
昭和 32年 (1957)	4月 27日	大字砂山字御幸ヶ丘 268-3(西本町4)に新築・移転し、落成式を挙行 <上越市域第4代目施設> <small>【広報なおえつ】</small>
昭和 46年 (1971)	4月 29日	高田・直江津両市の合併により、上越市立水族博物館に改称 <small>【広報じょうえつ】</small>
昭和 54年 (1979)	10月 31日	第1代目の上越市立水族博物館(旧直江津市立水族博物館)閉館 <small>【広報じょうえつ】</small>
昭和 55年 (1980)	7月 18日	第2代目の上越市立水族博物館が直江津高校の隣(西本町 4-19-27)に開館 <上越市域第5代目施設> <small>【広報じょうえつ】</small>
平成 29年 (2017)	5月 14日	新・上越市立水族博物館(愛称:うみがたり)建設のため休館 <small>【広報上越】</small>

この記事が書かれた2年前の昭和6年6月1日には、鯨波村(くじらなみ 昭和15年から 柏崎市となる)の浪花屋旅館が弁天岩水族館を開館しています(その後の経過は不明)。また、同年8月1日から9月30日の期間、上越線全通記念博覧会が開催され、第二会場として寺泊水族館が特設されています。この寺泊水族館は、寺泊実業協会が設立したもので、博覧会以後は常設となり昭和17年まで営業を続けました。

上越地域で初となる能生水族館は、昭和8年7月23日、能生町御山(おやま 通称/白山神社の北側方向にあたる地域)に開館しました。これは、能生町の多喜屋旅館を経営する瀧榮六郎氏が開設したもので、高田新聞(昭和8年7月24日発行)は『内部は大小十四槽で、鯉・なまず等の淡水魚や鯛・ふぐ・かにエビ等の魚介四十余類を放養し信に海底その儘の光景を呈してをり…【中略】…同水族館は大連星ヶ浦、東京品川、横浜、熱海等に水族館を経営する平田包定氏の手につたもので、我国水族館中最も斬新な方法をもつて築造されたものである。』とその様子を伝えています。

ちなみに、理由は不明ですが、直江津町の『海の会』の水族館建設は実現に至りませんでした。

戦前に瀧榮六郎氏が開設した直江津水族館と五智水族館

能生水族館は、避暑客や松本小学校や高崎中学校など県外からの入館者もあり、大いににぎわったようですが、冬季の休館中に大波により破壊されてしまい、わずか1年で閉館しました。

しかし、瀧館長はこの苦難にもめげず、昭和9年(1934)4月中旬から新たな水族館の建設に着手し、同年7月21日、直江津町の八坂神社境内(西本町4)に直江津水族館が開館しました。この水族館の情報は断片的にしか分かりませんが、新聞記事が伝える概要は次のとおりです。

当時の新聞が伝える直江津水族館の概要

- * 水槽のガラスの厚さは1インチ(約2.54cm)
- * 海水は1海里(約1,852m)くらいの沖合から取水
- * 海水の循環(ろ過)装置は最新の平田(包定)式を採用
- * 開館当初の営業時間は午前8時から午後9時半まで
- * 開館直後の昭和9年7月末には、県立能生水産学校の漁撈科練習船が能登沖で捕獲したアオウミガメを寄贈
- * 2年目の昭和10年は4月26日から11月30日まで営業
- * 2年目に水槽を増設し、新たに30余種の海水魚を収容
- * 大水槽には大鯛と大鱒を放流

直江津水族館は、開館以来、長野県からの団体客も入館し、直江津町の新たな観光名所になりました。ところが、瀧館長は、水族館への接続通路の開削や宣伝などで直江津町の協力が得られないことを理由に、営業2年目を終えると直江津水族館を閉館することを決めます。これを受けて、新潟市が誘致に乗り出したり、直江津町も存続運動を起こしたりし

ましたが、最終的に春日村の五智国分寺裏門の国道11号(旧北国街道/現県道大瀧・上越線)沿い(鏡池付近・現在鮮魚店のある場所)に新築・移転することになりました。交渉役となった五智在住の彫刻家の瀧川美堂(本名 びどう 寅吉)氏が能生谷村(現糸魚川市)出身で隣接する能生町の瀧館長と親交があったこと、移転場所の土地が提供されたこと、五智保勝会をはじめ地元有志の協力が約束されたことなどが、その決め手になりました。

昭和11年3月10日から移転工事が始まり、同年5月6日に五智水族館は開館しました。五智水族館の概要としては、高田日報(夕刊/昭和11年5月5日発行)が『同館(五智水族館)は水色の小映画館風の極めてスマートな建物であり…【後略】』、高田新聞(昭和11年5月10日発行)が「五智新名物の水族館は去る六日開館されたが、修学旅行団、各地観光団体の参観多く、連日非常な賑はひを呈してゐる。』と伝えています。ただし、次第に戦時色が深まっていきました。富山県の魚津水族館は、昭和19年3月に電力やその他資材の欠乏などの理由で閉館しています。同様の理由だと思われませんが、五智水族館も昭和18年中に閉館を迎えたようです。

戦後、新潟県内でいち早く誕生した中田松三氏経営の直江津水族館

昭和24年(1949)3月(期日不明)、直江津町の中田松三氏経営の直江津水族館が大字直江津1,202番地(中央₄)に開館しました。昭和45年に海岸に沿って市道(海岸環状線)が完成しますが、当時、海岸側の人家は砂浜と地続きでした。直江津水族館は、人家から一步踏み出した町有地の砂浜の上に建てられました。施設は、木造平屋建て、建坪86坪(約284.7㎡)で、海に向かって右側に入口が設けられていました。この水族館の設備については、新潟日報(昭和24年3月12日発行)が次のように伝えています。

『直江津名物の一つとなる水族館は同町海岸に建設中だが今冬雪がなかつたため工事が進み内部の設備もでき上がり四月一日開館の予定。海魚と川魚をなるべく多種類泳がして魚族に対する教育資料にする方針で塩水魚の水槽十、淡水魚二つと溜池二つを設け二十日ごろ富山県魚津、生地、滑川各漁業組合に頼んで海魚二十数種、川魚は三条、新潟付近で十数種集めて入れることになっており、この地方では珍しいので修学旅行期にはにぎわう予想。』

同年10月20日には、糸魚川町でも糸魚川商工会議所が糸魚川水族館を開設しています。また、詳細な時期は不明ですが、同年には第2代目の寺泊水族館も開館しています。直江津水族館が3月中に開館していることから、直江津水族館は、戦後、新潟県内でいち早く誕生した水族館だった可能性が高いといえます。しかし、直江津水族館は、昭和24、25年の2か年で営業を終了します。2年目の営業を終えた昭和25年10月、中田館長は、川澄直江津町長に水族館の買収・譲渡を申し出ました。糸魚川水族館の存在が影響したのかもしれませんが、その理由は定かではありません。結局、高額な買収費(中田館長の提示額は150万円)などが支障となり、直江津町への移管は成立しませんでした。

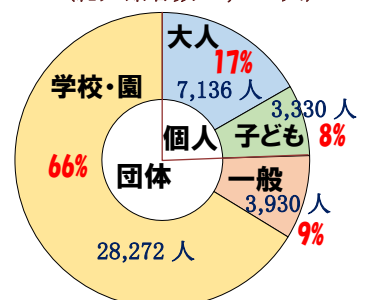


開館当時の直江津水族館(昭和24年3月)
(昭和56年開催の「明治・大正・昭和写真展」に中田松三氏が提供)

財団法人直江津水族館から財団法人直江津水族博物館へ

その後、経緯は不明ですが、直江津水族館は直江津町の有志20余名に買収されました(買収額135万5千円)。正式な手続きを経て、昭和26年(1951)3月1日に県から認可が下り、財団法人直江津水族館が発足しました。財団法人となったことで、直江津町から毎年20万円(昭和28年度は30万円)の補助金が交付されるようになりましたが、出資者への買収費の弁済のほか、設備投資、固定資産税、入場税などの負担により、経営状態はよくありませんでした。財団法人発足時から館長に就任していた金井政雄館長(出資者の一人でもあった)は、昭和27年分の納税の交渉のため上越地方事務所を訪れた際に、担当者から「学校相手であれば博物館にしたらどうだ」との助言を受けました。実際、財団法人となった昭和26年には42,668人の入館者がありましたが、学校や園の団体利用が66%を占めていました。この助言がきっかけとなり、同館では、直江津町教育委員会や地元出身県会議員の協力も得て、県教育委員会に博物館の登録を申請しました。昭和28年6月10日に県教育委員会の認可がおり、財団法人直江津水族博物館が発足しました。

昭和26年の入館者内訳
(総入館者数42,668人)



Category	Percentage	Number of Visitors
県内 (Prefecture)	36%	15,207
県外 (Outside Prefecture)	64%	27,461

(『昭和26年版直江津町勢要覧』から作成)

市立水族博物館としてのあゆみ

直江津市立水族博物館の発足

昭和 28 年(1953)12 月 8 日、財団法人直江津水族博物館の役員会で、同館を直江津町に寄付することが決定され、後日、請願が行われました。直江津町では同館から資料を取り寄せたり、金井館長から説明を受けたりして、同館の財政状況を確認しました。その結果、年間約 40 万円の出費で済むことが分かりました。直江津町でも、社会教育の充実や観光面の強化を模索していたこともあり、昭和 29 年 4 月 1 日に町に移管されました。同年 6 月 1 日、直江津町は有田村・八千浦村・保倉村・諏訪村北部を編入し直江津市が発足しますが、その 9 日後の 6 月 10 日に直江津市立水族博物館が発足しました。

直江津市立水族博物館の新築・移転

財団法人最終年の昭和 28 年(1953)の入館者数は 46,779 人ですが、直江津市に移管された 3 年目の昭和 31 年には 84,343 人を数えています。しかし、施設の老朽化が顕著であり、また設備の充実を図る必要があることから、昭和 32 年に大字砂山字御幸ヶ丘 268-3(西本町 4)へ新築・移転し、4 月 27 日に落成式が挙行されました。施設・設備の概要について、広報なおえつ(第 11 号/昭和 32 年 5 月 10 日発行)は、「敷地九百坪、本館及び付属建物一棟一一三・五坪、放魚槽、大小十三槽、観覧室中央には大平槽があり日本海産魚族及び水棲動物数十種を飼育、その外展示室には、熱帯魚標本、模型、図表等を展示【後略】」と伝えています。屋外では、クマヤサル、クジャクも飼育され、子どもたちの人気を集めました。入館者数は 7 万人後半から 8 万人前半で推移しましたが、昭和 41 年に初めて 9 万人を超えました。昭和 46 年 4 月 29 日、高田・直江津両市の合併で上越市が発足したことにより、上越市立水族博物館と改称しました。

上越市立水族博物館の新築・移転

御幸ヶ丘に水族博物館が建てられてから 23 年後の昭和 55 年 7 月 18 日、二代目の上越市立博物館が直江津高校の隣(西本町 4-19-27)に開館します。新築・移転の理由について、広報じょうえつ(第 150 号/昭和 53 年 10 月 1 日発行)は、「年間八万人の見学者でにぎわう市の水族博物館。でも自慢するにはちょっと施設も内容も貧弱です。そこで市では、来年度から二年事業で、日本海側随一といわれた秋田県男鹿水族館と肩を並べるような水族館を建てることにしました。」と伝えています。

国指定重要有形民俗文化財の「どぶね」と巻き貝をモチーフとしたこの水族博物館は、鉄筋コンクリート造 2 階、地下 1 階、総面積 4,685 m²で、水生生物約 300 種類 6,000 点が 56 基の水槽で展示されました。また、旧館は冬期間休館(11 月下旬～4 月中旬)していましたが、通年利用できる施設になったことも画期的でした。初年度の入館者数は 379,075 人に達し、平成 29 年(2017) 5 月 14 日に休館するまでの 37 年間に約 970 万人が訪れました。

上越市域に開設された水族(博物)館の変遷

